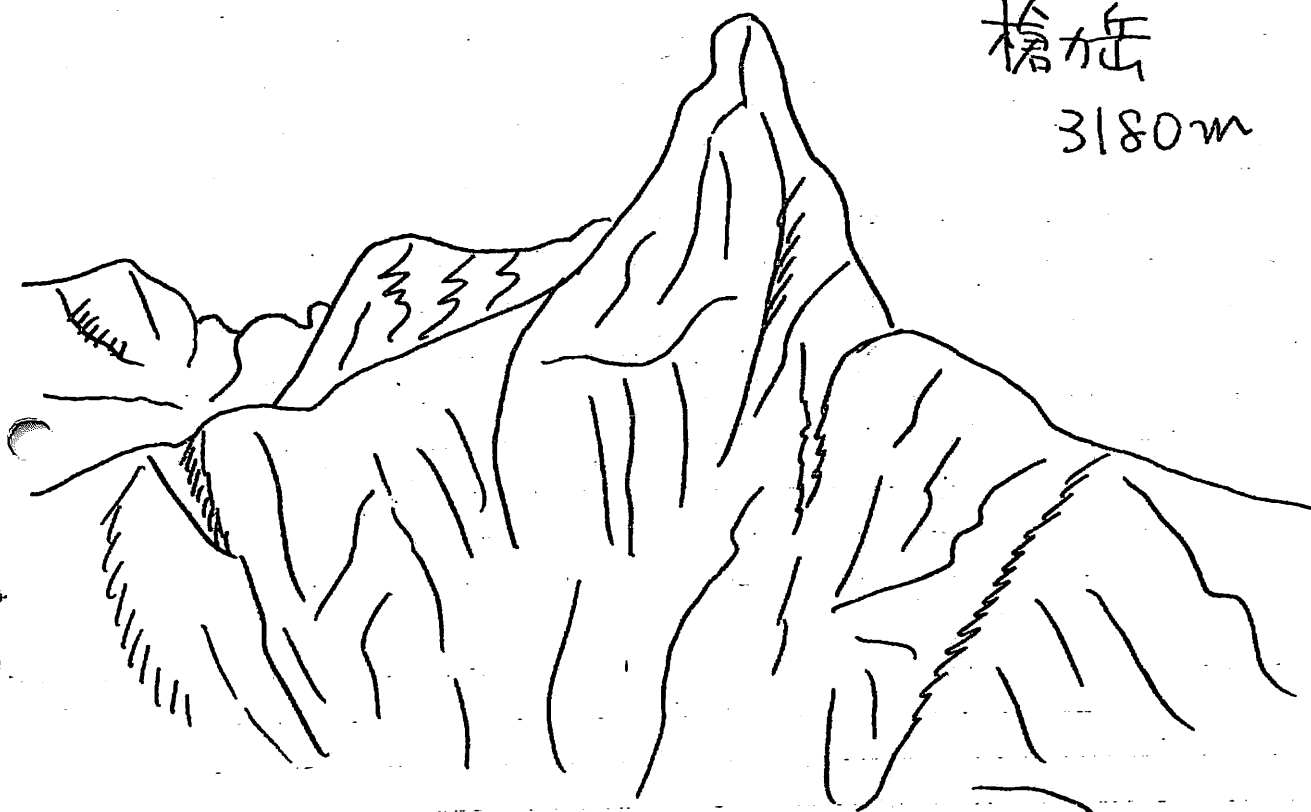


# 91年度 新人合宿報告書

槍ヶ岳  
3180m



信州大学山岳会

今年も横尾本谷、淵沢の雪渓が消えるのが早く、いつもの年と  
多少勝手が違ったが、比較的天候にも恵まれ、よい合宿ができた。

1年生は、いさなり3000m級のピークに立つことができて、満足感  
をおぼえたかも知れないが、もう一度合宿中の自分の姿をよく振り返り  
かえてほしい。ピークに立つということは、山に登る過程の中の一部  
分でしかなく、事前の準備や、生活技術等が確実に速くできる  
力がとても重要だということがわかったと思う。これから地味な  
面でも手を抜かず、しっかりやる姿勢を大切にするよう心懸  
けてくれ。それから体力不足を感じた者も多かったろうが、これは  
自分自身で乗り越えるしかない。縦走合宿、夏合宿はすぐそそだ。  
納得いくまでトレーニングしてのぞんで欲しい。

2年生は、ゆずか2人で大変であったが、よく頑張ってくれた。  
1年生と、これから最も多く山行を共にするということと常に  
忘れず指導にあたってもらいたい。

上級生もいろいろ御苦労様でした。つめたい雨の中  
下山で美味しいビールが飲めなかったのが心残りだが  
全員無事山を下れてなによりである。

河西貴史

## 目次

page 1. リーダーの言葉

2~9 行動記録

9~10 係の反省

11~17 個人の反省

18~24 作文

5/26 (日)

記入者 (安保)

Xンバー

(Aパーティー) 河西, 藤江, 田尻, 笹森,  
安保, 高橋, 田中, 神山

- 4:30 学校から出発。晴れ。①
- 5:25 二俣到着。晴れ。①
- 8:30 岩魚留小屋到着。曇り。◎
- 13:05 徳本峠到着。小雨のうち曇り。● → ◎
- 14:00 徳本峠出発。◎
- 16:30 ● テン場到着 (白沢出合いTS)

(感想)

非常につらかった。明日もがんばろう。

5/26 (日)

記入者 (籠谷)

Xンバー

(Bパーティー) 植垣, 橋口, 伴野, 籠谷, 佐藤

三木, 松沢, 長谷川

- 4:30 ① 学校 発
- 5:25 ① 二俣 到着
- 8:21 ◎ 岩魚留水 到着
- 13:21 ● → ◎ 徳本峠 到着
- 14:00 ◎ 徳本峠 発
- 16:30 ● 明神 テン場 到着

(感想) 体がうがいたい 山の天気はよくかおるんだなと思った

5/27 (月)

記入者 松澤

メンバー : L 河西, SL 植垣

藤江, 田尻  
伴野, 尾野  
安保, 高橋  
佐藤, 三木, 田中, 神山, 龍谷  
長谷川, 松澤

5:50 テン場 発 ●

6:40 徳沢園 到着 ○

9:00 横尾 B.C 着 ○ 晴れ間此

(感想) B.C 設定。明日からか合宿本  
番という感じで、つらいかもしれない。  
靴はずれでも、ではじめてのことだし……  
最終日までがんばるしか、ない。

5/27 (月)

記入者 伴野

メンバー 河西, 植垣, 田尻, 尾野, 伴野

10:50 @ B.C 発

12:00 @ 本谷出合の一段上

13:00 @ 発

14:20 @ B.C 着

雪染が崩壊していてコワイ。昨日とは大違っていた。

5/27 (A)

記入者 田中

×ハ一 (Aハ一) 河西, 田尻, 伴賢, 田中, 高橋, 籠谷, 松澤

4:30 B.C 発

7:25 洞沢ヒツ行着

雪割

14:00 〇から沢ヒツ行発

15:15 〇 B.C 着

(感想) 帰りが楽(カ決)  
今日はお帰りができていない。

5/28 (B)

記入者 神山

Bハ一

植垣, 藤江, 笠森, 松下

三木, 佐藤, 長谷川, 神山

4:30

B.C 発

天 晴れ

7:25

洞沢ヒツ行着

快晴

雪割

直上, 直降, トビース, 斜上, 斜降  
ビッケルストップ, グリセド, シシート

14:00

洞沢ヒツ行発

晴れ

15:15

B.C 着

晴れ

感想

初めての雪割でオチカケが怖い。グリセドは怖い。ビッケルストップは何度もオチカケが怖い。同じことを何度も注意された。個人的には靴が痛い。

5/29 (水)

記入者: 長谷川(哲)

B19-テ1- 植桓, 田尻, 笠森, 三木, 松沢  
籠谷, 長谷川

3:20 B.C. 登 天気 くもり

4:40~50 休けい 晴

5:55~6:25 洞沢 晴

(この少し前に、雪割が完了した)

内容が28日と同様

7:25 ~ ガ行ノグラード付近で 雪割 天気快晴

11:30 穂高岳山荘 天気霧

12:15 洞沢岳 天気霧

12:45~13:00 穂高岳山荘 天気霧

途中尻セードモツ

2:00~2:25 洞沢 天気くもり

3:35 B.C. 着 天気くもり

感想) 朝の洞沢への全カ疾走で、ももの筋肉に  
疲労がたまり、沢の雪割でうまくできない場面が  
あった。松本に帰ったが、筋トビをする必要を感じた。

5/30 (木)

A. パーティー, 河西, 藤江, 伴野, 三木, 松澤  
長谷川, 籠谷.

4:10	◎ BC 発	◎
5:15 ~ 5:50	休け	①
	雪訓: 直上:	①
6:45 ~ 7:03	涸沢	○
7:15 ~ 9:15	雪訓	○
	(直上, 直降, トラバース, 斜上, 斜降 C, クエスト, ア, グラセード, アセート)	
9:35	雪訓の場所出発	○
10:35 ~ 42	5.6 コル	①
11:03 ~ 12:45	6 峰	①
12:06 ~ 12:08	5.6 コル	①
13:00 ~ 13:07	涸沢	◎
14:31	BC 着.	①

感想, 今日楽しかった。つぎが来くと。  
6 峰に登ったのはすごく楽しかった。

5/30 (木)

記入者 高橋

B パーティー: 植垣, 長谷川 (四), 田尻, 笹森, 神山, 安保,  
田中, 佐藤, 高橋

- 4:10 ① B.C. 発  
6:30 ① 洞沢ヒュッテの近く  
雪訓: 直上  
6:45 ① 洞沢ヒュッテ  
雪訓: 直上, 直降, トラベース, 斜上, 斜降,  
ピッケルストップ, グリセード, シリセード  
10:30 〇 五, 六のゴル  
11:00 ① 六方  
12:05 ① 五, 六のゴル  
12:55 ① 洞沢ヒュッテ  
14:40 ① B.C. 着

感想: 今日は六方の頂上也晴れていて、なかなか楽しかった。  
でもいいかげんに帰りたい。

5/31 (金)

記入者 安保

- 4:20 B.C. 出発  
5:10 ① 新村橋到着  
6:00 ① 松枝尾根に到着  
8:35 ① 松枝尾根の途中で1本とる。奥又白池まで  
あと高度300m。  
9:00 ● 途中で引き返す。  
13:00 ● B.C.1に到着

(感想)

今日は奥又白池まで行けず残念だった。松枝  
尾根はけっこう険しく、容易ではなかった。雨はやった。  
気が滅る。



6/1 本隊 L 河西. 長谷川. 田尻. 橋口. 藤江. 世森  
牧野. 小久保. 1年生全員 (佐藤はT1 Keeper)

◎ 4:30 BC ——— ① 5:50 — の俣出合い。 ———  
—— ① 6:20 槍沢 ロッジ ——— ① 8:00 大曲り ———  
- ①/◎ 11:10 槍の肩 ——— 頂上ピストン ——— ◎ 12:30 槍の肩越  
—— ① 16:40 BC

赤沢の岩小舎をすがるころから雪がではじめる。雪渓には  
所々氷が入っているが充分間隔をあけて通過する。  
1年生の中の3人は時間切れのため槍の肩とまり。  
ここにこれほ槍の穂先はいつでもいけるぞ。 (河西)

6/1 (土)  
屏風岩登攀隊 L 植垣. 伊半野.

5:00 B.C 発. ◎  
スタンディングアワフアビレイで雪渓を渡る。  
7:00 下部スラブ取付き. ◎  
4ピッチ。  
コンテでT<sub>2</sub>へ  
10:40 T<sub>2</sub> ◎  
10:50 東稜取付き. ◎  
4ピッチ  
15:05 稜取付きをスエ残し下降取付き◎  
15:20 下降。  
16:10 T<sub>2</sub> ◎  
T<sub>4</sub> 尾根を4ピッチ懸垂  
雪渓1ピッチ fix  
18:10 雪渓を渡ったブッシュ帯 ◎  
18:50 B.C 着 ◎

屏風岩に登るとは思っていたのだが心の  
準備ができていないのでドキドキした。本チームの  
経験もつめとて良かった。T<sub>4</sub>の3回の人工の練習  
をしてスピードアワフアした。 (伊半野)

6/2 ⑦ 7:50 BC ——— ⑧ 9:10 新村橋、奥又出合いへお参り  
————— ⑨ 10:30 徳沢 ————— ⑩ 12:30 上高地。

エッセイの反省

米の量が少なかった。1年性が多かったのだ。そのところを、考えればよかった。  
初日の米は、1人あたり、1.9合以上あったのに、1年性の2回戦で、ほとんどなく、これは、  
個人的な意見としては、新人合宿は、寝もへり、食う時間も17.ころあるので  
昼も3食、もう少し多くしてあげようと思う。  
朝×シについては、焼リバを例年通り、1.5kgとしたが、多いという声があった。  
もう少し減らしても、問題は無いだろう。あとは、適量だった。  
おやつについては、プリンがうすかったのと、プリンもおかしを付けなければよかった。あとは、  
問題は無いが、もう少し考えれば、おもしろいと思う。  
晩×シについては、2日目のカレー以外は、問題は無いと思う。量は、バズッが、いっぱい、いっぱい  
あんけ以上は、無し。具は、あんけものが多いと思う。ラードについては、今回3本もっていったが  
初日の焼リバごもりつかつたのは、初日は別に用意したい。  
あとの調味量については、量も良かったと思う。しかし、調味量の管理は、もう少し工夫したい。  
おしあけについては、焼に焼けたものは、管理がめんどうで、使いづらと思う。あとで残してしまおう。  
おTものについては、8/10kgほど適量だと思ふ。  
ジュース、レモン茶については、くびるのを、レモン、ヤドリねばりが多い。  
量は、適量だろう。(ジュース20、レモン茶15)  
サラダ油は、3Lでよかった。小麦粉は、1.5kgほど適量。

## 装備の報告

使用量	ガス 6ℓ (13.5ℓ)	53cc/泊・人
	×7 81本 (120本)	12本/泊
	ローヤ 2.5本 (8本)	0.36本/泊

### 反省

- 。 エスペースに内張りが付いていた。
- 。 下の火力調整の部分の針金が切れやすかった。
- 。 下の手が針金のもはやり使いにくい。

残置 シュリシゲ 9本

## 会計報告

収入	学士より	20000円	
	古賀さんより	2000円	
	山田さんより	1000円	
	橋口	8928円	
	長谷川 (聡)	10090円	
	15000円×15人	225000円	
	総収入	266018円	
支出	交通 (往)	26890円	1人1680円
	交通 (復)	41200円	1人2423円
	エッセン	135331円	1人1日1137円
	装備	43061円	1人2533円
	雑費	310円	1人18円
	総支出	246792円	
残高	20226円 (松本の部費へ)		
その他	井関さんよりお酒をいただきました。ありがとうございます。 学士、古賀さん、山田さんからのカンパありがとうございます。		

一年生は御苦労をまじりました。何も分からずとまどうことばかりだったと思います。これからは各自自分なりにデッカイ目標を持ち、トレーニングし、技術、知識を高め、自分で考えながら山登りをしてほしいと思います。また、山行中は、(山行中に限らず)自分のことばかり考えず、もっと他の人のことも考えましょう。  
二年生、三年生は更にたくましい上級生になって下さい。  
植垣 健太郎

かんそう

今年はやりに雪が少ない。雪ヒケがはやいニともまたるうか。積雪したいも少なからにちかいない。今年も夏はお山でも水不足に悩まされりかも。

長谷川

今回の新人合宿は上級生が7~9人で、少なくて大変だった。個人的に上級生としてのパーティー全体に対する酒の量がまだまだ甘く、自分のことで精一杯だった。二年生は2人だけ为本当にごくぶり様だった。1年生もめげずに頑張ってください。(田尻)

新人合宿はお利参加していないのでいまいちピンとこない。しかし、リーダー部員としてやるべき事がいろいろあったと思う。もっと隊全体をみる必要があると思う。

はに

## 反省

2年生の時のようにかまかせに歩っていたのは良いのとはちがってリーダー部員というのは常に全体の注意をするよゆが必要であると痛感した。次回からはどんどん仕切、てCL・SLに負担をかけないようにしたい。

感想  
ハッピ

ゲートがあるので二俣までタクシーが入ったり、異様に雪がすくなかったりと変な合宿でした。一年生は芸と体力を沢山身につけて下さい。

藤江

世教道也

2年生の新人合宿ということで気ばかりあせっていたが、けがもおもうようにトレーニングできなかった。そのために合宿中思うように動けない時があった。

エッセイなど自分自身で、たのむ方向のことよく理解していかれたために、自分自身のことには気がまわりすぎて、一年生を、よく見るこたができた。

今年の新人合宿も大気がよく、昨年いけなかった倉にいて、つかれたけれどよかったと思う。

一年生を見ても余裕に欠けていた。体力的にも精神的にもまだだ。実力がないと1年を見ても余裕ができていけないので、その目的意識をもつて山行に望みたい。昨年、熊鷹岩を見てその自力におどろいたが、その熊鷹に一年後の今年登れたのがうれしい。しかし落石はとてつこつ力いタ。

伴野 達也

新人合宿の反省 および感想 安保 晃

今度の合宿は僕にとって初めてのことが多かった。そのため、不備な点が多く見られた。

装備面では、キスリングのバックパックがうまくいかず、左右のバランスが悪かった。また、初日および後半、雨が降ったが、個々の防水が不完全であった。

体力面では、やはり体力不足を感じた。と同時に上級生のタフさには驚いた。

また、今回行ったところを幸物などで前以ってよく調べておけば良かったと思った。

テメ張りやエッセン等の時など要領よくできないところがあった。こういったところは皆に迷惑をかけるのでテキパキやりたいところだ。

全体を通して、上級生には如喝られっぱなしで迷惑をかけたが、事故もなく良かったと思う。

## 感想

何度も何度もこれ以上歩けないと思った。その度に周りからのばげおしの言葉に助けられた。最後までがんばれたのもそのおかげだと思う。

専訓は恐ろしかった。眼下に広がる急斜面に頭はクラクラし、蹴込みでも一発では止まらず、上級生からの叱責が飛び交い、正直言って早く降りたくてたまらなかった。

六峰と槍ヶ岳のピークにたつことができて良かったことは残念に思いつれどこの合宿に最後まで参加できて本当に良かった。

最後の晩の天ぷらとビールが感動的においしかった。

## 反省

もっと速く歩く。出発の準備、エッセンでの動作など機敏にする。それから今回は慣れないせいもあったけれど、睡眠も十分に取ることで「さすが」に後半体調をくずしてしまったので、その日の健康管理にも気をつけたい。そこで次回からは是非、エアーマットを持っていきたい。寒さにも強くなる。

神山 利木

# 新人合宿の感想

長谷川 哲也

新人合宿で最も強く感じたことは、「大学の山岳部」という所は、つらい所だなぁということだった。ひとこと「つらい」と言っても、いろいろな「つらさ」があった。

まず、初日のキスリングを背負っての徳本峠越えである。以前から、キスリングというものを背負うのがたいへん重たいという事は知っていたが、これほど肩に苦痛を与えるものだとはいえ、思わなかった。キスリングを背負って自分へからだがかたく感じられ、じがはみんがいきなり、精神科の医者へ世話になるべきだ。

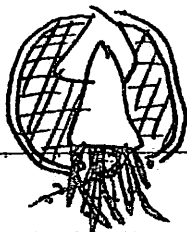
おひつ、「つらいなぁ」と思ったことがあった。いつ果てるかわなく続くように雪割は、凄くストレスがたまった。雪割が楽だと言っていた人はいらぬけど、僕にはつらかった。

続けていくうちに、段々イヤになってきて、集中力が鈍っていく。と同時に、いかにやるべきかをして、先輩に怒鳴られる。

雪割を続けていくのは、すごくゆううつだった。

今まで、高校生としてやってきた僕の山登りは、ほんとうに「おろやろけ」だったような気がした。大学生としての、信大山岳会としての山登りを体験できるといって恵まれた自分にとって、

新人合宿で受けた「つらさ」は、新たな決意になったような気がする。



# 田中宏治の反省文&感文

No. \_\_\_\_\_

Date \_\_\_\_\_

## 反省文

- ・合宿前の個装の準備から合宿中のいろいろな準備(エッセンや出発前など)がよくなりましたのでこれからはちゃんとしたい。
- ・先輩に何かいわれたらきちんと返事をし言われたことを守るようにしたので良かったと思う。

## 感文

雪の斜面を登るのは歩みづらいし、滑るしと怖いけど、ただ下りる時は楽しかった。これがいわゆる「苦あれば楽あり」だと思った。

1991.6.4

三本

感想 & 反省

重い靴、重いスリッパ、せたらと長い道のり、まずい飯、汗でぬれた服体がついていかな。初日から、せたらと息切山がする。足が前に出ない。途中の山道にいたらいきを見ろ余裕もない。もう少しで六場だと教えてもらっても、立ち止まりながらしか進めなかった。おやくテムをやり始めたころには、雨さえ降ってきて、皆に迷惑をかけた、情ない気持ちだった。

その後の日程もいつも歩くのが遅かったり、千際が悪かったりして、迷惑をかけたつづけていた。

上級生やみんなには、感謝のしようもない。次の機会には、できるだけ体調をととのえて、せめて遅山なようについていきたい。



山では団体行動なので、これを行つ以上 みんなに合わせなければならぬと思ひました。自分のペースがほしいところと、もうどない所の区別をしっかりとつけたいとためだと思ひました

高橋 敦

新人合宿の感想

まず、自分がどんなに小さな存在かを実感した。体力、知識の不足もあるが、雨や、風に人が、こんなにも振り回されるとは思わなかった。二度とあんなことはいやだとも思っているが、興味もわいてきた。

反省

体力不足とエッセン、その他主に生活面での手際の悪さを反省している。

感想

松澤 朋子

思っていたより「ものをかんがえる」ということをしてこなかった、というのがこの合宿中の正直な感想で、それだけ(思考力が働かないほど)体力的にまわつたのだと思う。ただそれと、帰ってきてもう次のことを考えている自分を思うと、それだけのものがこの合宿にあったのだと思う。

反省

体力が足りないのはもちろんのこと、山を登っている時だけでなく、B-Cでの生活においても反省すべき点は多々あり、気をつけてなおしていった。

新人合宿を終えて  
1年 佐藤 崇

とにかく疲れた。テントを寝たのは初めてだったが、テントの中でシュラフで寝ることがこんなに不快なものだとは知らなかった。あと困ったのがめしだった。1回目のマカホテはのどにつま、水がなかつた。たう食えなかつたし、夕食の量の多さにはまいった。シュラフは味がなくてわすかに入っているサラミが唯一の救いだった。何日目かの何かしる気のものだったと思うが、2杯目を何とか食い終って食器を口からはなした瞬間に盛り付け係の笹森さんと目が合、て、「佐藤、もう一杯」と言われてしまった。

体力はあったのに、足のけがで槍に登れなかったのかとても残念だった。みんなが槍に行っている間B・Cで待っているのはとてもつまらなかった。何もすることがないくらいなら、また「佐藤——」と怒鳴られている方がよかったと思、た。

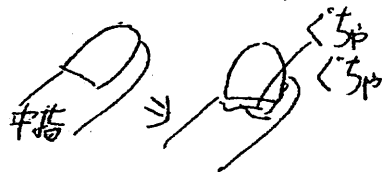
B・Cから涸沢ヒュッテまで行く途中で一本とったあとに「とほせ——」と言われてからヒュッテまで行く時が一番しんどかった。またまた体力が足りないと思、た。

先輩達には大分とならぬたか、普段はいつもとあまり楽しく話かて、たし、練習中にとなるのき、「しめる所はしめる」という感じだ、たので別にいやな感じはしなかつた。それにとならぬたりするのは今回だけだと思、て安心した。

今回の新人合宿を通して仲間とずいぶん仲良くなつたし、これから互いに助け合、て頑張、ていこうと思、う。

# 田中宏治のノン・フィクション

あれは小学校4年の冬の大そうじの時だった。  
 その日僕は廊下の当番だった。廊下にはふりたみ机が山ほどつんで  
 あった。先生が「机のむこうもて」と言った。そして机をもちあげたし、人かん  
 机の足が開いてきました。と同時に僕の左手の指先、なんかにビリビリする  
 感覚がした。机をよみ左手の指をみると一なんと  
 中指のつめが つめの根本がしずみ平常の時より  
 30度くらい傾いていた。その指をみた瞬間——  
 これはいたがらねばならないと思った。(実際は  
 おまじいたくなかった)。



先生と二人で病院へ行くと、医者に指を見せたら「これははがなくちや  
 ためたね」と言われた。そして医者はペンチみたいなものを取り出しそれで  
 つめをわきとじわりしわりと引、はが始めた。その時の感覚は尻尾の  
 一点を50・60本の針で刺し、その針をぐくぐく動かされているようだった。  
 その状態が30分くらい続いたと思う。そしてつめははがとられた。

翌日親といし、大病院へ行た。そこで医者はレントゲンの写真を撮りて  
 「つめの根本の所の骨が少しえぐられて打。あと、このつめはもろはえて  
 こないかもしれません」と言った。その言葉と聞いた時、本当につめがはえて  
 こなかったらどうしようかと思た。が、1か月月日はたろつめはしわり  
 しわりと伸び始めてきた。

今は、そのまは完治した。その時の影景で左手の中指の  
 指先はつめの所が少し変になっている。

作文

長谷川 哲也

山登りとは、明るく、華やかな、生気に満ちたものであろうか？  
それとも、もつとさぶゆくて、苦しく、抑圧されたものであろうか？

むしろ山登りにも、さまざまなお山登りがある、人それぞれ、  
時代に応じ、いろいろな環境による。

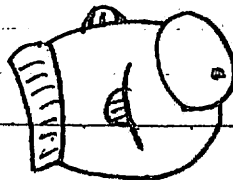
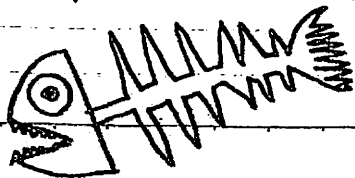
ともあれ、今、こうして山を志す私は、かつてその「山登り」という  
響きを、いかほど軽蔑したことであろう。「山登り」なんぞ、単に  
疲れるだけであり、この世に無益な邪魔物で、よく取っつかないがもろく  
「山登り」なんかやめよもんだなと、思ったものだ。た。  
がしかし、今こうやって、僕自身、山に挑んでいるのだ。

まったく不思議である。「山登り」をするというその理由を自分  
自身でもつかみかかっている。人にどうして山に行くのかを聞かされても  
答えるのは極めて困難だし、たぶん、「そこに山がゐるからだ」と  
答えたところで、それは答にはなっていない。

「山登り」について考へると、考へれば考へるほど、わからなくなる。  
山に登る理由、山登りとはどんなものなのか、どんな  
山登りをすべきなのか、そして、どこまで山登りをするべきなのか？

今、は、きり言、て、「山登り」が何だかわからない。

だから、答えておいてほしい。「山登り」が、は、きり言  
自分でわかるようになりたい。また、自分で理解できる  
山歩き、山への接し方を考へたい。



(ふしぎ)

要保 晃  
ズシリと肩に食い込むキスリングを背負って、僕らはサル<sup>の</sup>飛びかう峠  
を越えた。  
しかし、あのサルたちは僕らをどう見ていたのだろう。  
ラクダの一群かと思っただかもしれない。いや、確かにキスリングはラ  
クダ色をしているが、あんなところにラクダがいるはずがない。こくら  
いサルだって知っているだろう。だいたいいサルがラクダを知ってい  
るだろうか。一匹くらいラクダを知っているサルがいてもいいがそんな  
サルはたぶんいなかったろう。  
やっぱり人間だ。いくらキスリングを背負っていたって僕らだって人間だ。  
サルが僕らを人間だと思われないはずがないではないが、絶対そうだ。  
そうあって欲しい。種むかうそうあつて、おねがひい。  
サルがやつめ。木の枝の上から僕らを見おろしてなまいきはやつだ。い  
つかお前らにもキスリングを背負わせてやる。

## 新人合宿をへて

## 籠を 籠解

正直いつおん判おもしろくない合宿でした。合宿中は  
何となく早く帰りたいと思っだし一途自分かすこく長く感じ  
ました。ひきつらなつた。あつたかどうかわからぬが、思  
います。あんなに久しぶりで二度とこんなことおねがひ。とい  
う思いもどろろろろろしました。帰るおん  
合宿の生活が長いほど感じるおんたろろろろろ思い  
ました。授業をやらぬおんおんおんおんおんおんおんおんおん  
います。気がおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん  
うおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん  
を忘れたおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん  
あんなに久しぶりで。たかろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
何かを見つけたいと思つた。

## 作文

昔、僕は、マンションの三階に住んでいました。マンションといっても、最近のイメージにあるような高級なものではなく、公団住宅のような感じ  
です。

ある日、僕は外に遊びに出て、帰って来ました。天気はそう悪くありませんが、昼間だ問いうのにうすぐらい、いやな天気でした。下の駐車場は、いつもは子供が大勢遊んでいるのですが、その日はだれもいませんでした。何の音も聞こえません。

そのマンションは、各階には、部屋が二つずつ、向かい合わせになっていました。階段を上って、自分のうちまで来ました。出も、ドアには鍵がかかって、開きません。

仕方がないので、呼び鈴を鳴らしました。しかし、何度鳴らしても、だれも出ません。

おかしい。何か変だ。これは本当に僕の家だろうか。

突然、ドアが開いて、知らない女の人のでてきました。ここは、あなたの、家では、ありませんよ。

僕は、びっくりして階段を駆け上がりました。しかし、次の階にも自分の家はありません。

その次の階にも、その次にもその次にも自分の家はありません。どんどん階段を駆け上がっているところで、怖くなって、目が覚めました。

神羅には山行してものほけく、たから山登り、岩登りなどというものが存在せず、それは本当にTVや雑誌でみる理解ではない世界のことである。おまけに雪など知らないから雪山などおぼつかたのである。

今回の合宿では山の風景はもちろんだけれど、生まれて20年目に1st初めに踏みしめる雪に素直に感動した。できれば雪だるまも作りたかった。それと雪合戦も殺かたにやりたいと思ったけれどそれは下界での楽しみとして冬までとっておく。

特に雪の話をするとき「スイナー」と言うけれど彼方には雪訓で起すおぼつかたにラーメンを食べる苦しみはやはり理解できない世界のことであると思う。

神山 利木

合宿前夜、「今、想像している以上にきついなと思うよ」と言われ、胃が痛くなるほど緊張してはいまった新人合宿でいたことが、実感したはずのそのきつさ、つらさがとどろいたか、今よく思い出せることかたでできません。(なんでばかなんでしょ!) 頭の中に残っているのは、上級生の言葉の断片と、「朝でーず、起きて下エーい」のコールと、飛行機雲と雨の降った上高地。途中で「帰りたい」と確かに思ったハズなのに、その嫌悪感、は、いったい何処へ行ってしまったのでしょうか? 今は、頭の中を真っ白にしてたぶん山へ行きたいと思う。しかし、さすがに夏の縦走のキスリングを思うとおそろしくなる。今日このごろです。

松澤 冊子

1991. 6. 7. 三木 作文

古本屋にはよく行った。ほとんど毎日行った。

だから、いろいろなものをみた。

浮世絵のできそこない、ソビエトのレコード、古いめんこ、映画の台本、  
海外のTVガイド、アカーサーがきEときの新聞、ヒロセトが馬上で  
敬礼している絵はがき、昭和30年代の温泉案内、地下水脈図、  
豆本、サイン本、同人誌、ホモ雑誌、超念カニール、アニメのカラーシート、  
1区間の円ましおの古いヤカ符、番付表、戦時中の配給券、  
アトムの描きポスター、作家の描いた絵、能画、古銭、知らない  
人の詩集、十年前の、十年後を予言した本、すっかりはぐれた森永製、  
一冊三冊の文庫本、覚えておかないものの数々。

とりあえず、毎日 神田古本街に行っていた。

大学にはあまり行かなかった。





新人合宿報告書 1991

信州大学山岳会

印刷・発行：松本